PB

リードでもない。ましてやドラムでもない。
"ミスター"の称号はベースマンにだけ許されるんだ。
ロックにスピリッツを吹き込む「PB」

メープルネック
＆メープルフィンガーボード
厳選されたメープル材を使用。芯の締った豊かな音量感とスムーズな演奏性の両立に成功。PB-600にはメープルワンピース削り出しネック。

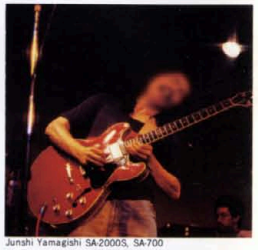
オーソドックス・フィニッシュ
木地を活かしきった入念な仕上げ。ジャストフィットするバックカッティング、深いカッタウェイがひときわ豪快なベースランニングを可能に。

Wポールピース・スプリットタイプ「P」1・2弦、3・4弦のそれぞれにピクアップユニット、さらに1本の弦に2コずつのマグネットを対応させたPシリーズマイク。ストレートでパンチのあるサウンドが特ち味。

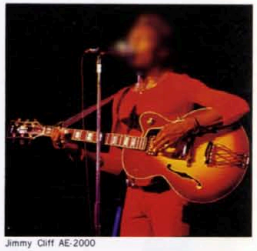
PB-600
P-Iマイクからは分厚く立ちあがる地ゴロのような低音が。入念に削り出されたセン単板ボディ。メープルワンピースネックのフィット感もすばらしいハイグレードな1本。
マイク＝Wポールピース・スプリットタイプP-I×1
コントロール＝ボリューム×1、トーン×1
胴＝セン単板/棹＝メープル
指板＝メープルワンピース
胴-棹＝ダタッチャブル
糸巻＝クローバーリーフ型
弦＝フラットワウンド
重量＝4.0kg
¥60,000

PB-400
オーソドックススタイルのボディに高感度P-IIマイクを搭載。音量感たっぷりの太い低音がベースラインをきわだたせる躍動感満ちあふれたロックンロールベース。
マイク＝Wポールピース・スプリットタイプP-II×1
コントロール＝ボリューム×1、トーン×1
胴＝セン/棹＝メープル
指板＝メープル
胴-棹＝ダタッチャブル
糸巻＝クローバーリーフ型
弦＝フラットワウンド
重量＝4.3kg
¥40,000

George Terry SG CUSTOM

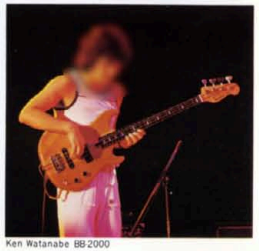


Junshi Yamagishi SA-2000S, SA-700



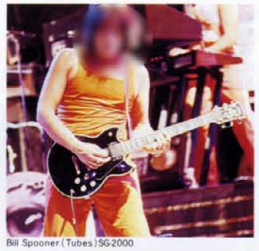
Jimmy Cliff AE-2000

Miroslav Vitous BB-2000



Ken Watanabe BB-2000

Roger Steen (Tubes) SG-2000



Bill Spooner (Tubes) SG-2000

Julian Junior Marvin (B.M.W.) SG-2000

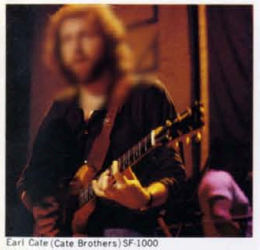
Ernest Ranglin SF-1000

Akira Wada SA-1000

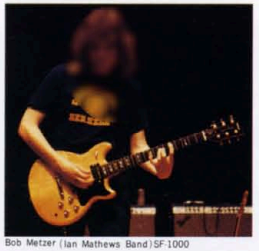
Issei Noro (Casiopea) SG-2000

Keiske Kuwata (Southern All Stars) SJ-800

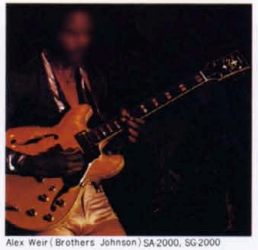
Takashi Ohmori (Southern All Stars) SA-1000



Earl Cate (Cate Brothers) SF-1000



Bob Metzer (Ian Mathews Band) SF-1000



Alex Weir (Brothers Johnson) SA-2000, SG-2000

Suzi Quatro (Tucky) BB CUSTOM

Donald 'Duck' Dunn BB-1200

Mark Andes (Fire Fall) BB-2000

Kazuyuki Sekiguchi (Southen All Stars) BB-2000

Aston Barrett (B.M.W.) BB-2000

Leebert Morrison (Jimmy Cliff Band) BB-2000

かけがえのない愛器を選ぶコツを クラフツマンからひと言ふた言

まず、どんな音が欲しいのか。初めて手にするギターはその後の音楽性に決定的ともいえる影響を与えてしまうものだ。ハードでいくか、ソフト＆メロウでいくか、はたまたブルージィに泣くか、断然ポップスだとか。人生を賭けるぐらいの意気込みでここは悩みぬいて欲しい。サウンドの傾向を摑みかけたら次は対策だけれど、この段階ではどんな音をどのモデルが出しているかを研究すればいい。どのプレイヤーがどんなモデルでどんな音を出しているかなどと。有名プレイヤーが弾いているかないかはギター選びのためのひとつの目やすだ。ここまでくると耳に書だこ、手にカタログだこ、目は血まなことなっているのが通例だけれど、サウンドの傾向を摑みきるのもこの時期じゃないかな。カタログでのチョイスはこの上なく楽しいものだ。が、ここはむしろクールにやって欲しい。どんなポリシーをもってギターをつくっているか。それを具体化するためにどんな素材を使っているかを、全体から部分、部分から全体にわたってしつこいほどに見きわめて欲しい。そして、かけがえのない愛器に、見た目だけに凝った音創りにオマジメなギターを摑まないためにも、結局は直接手にとって確かめなければならないことに気がつくと思う。それもギターに強くなればなるほど。ここでようやくにして私たち設計者とギターフリーク諸君がギターを媒介にして出逢うわけなんだ。ここでフリーク諸君、さらに冷酷になって欲しい。たとえば、ネックが反っていないか、弦がサビていないか、弦の高さは適正か、ピックアップと弦との距離は……などなど。なぜなら、最終の調整がしっかりしているかどうかで設計者の意図した性能が半減してしまうこともありうるのだ。もちろん、ギターは生きているのだから調整状態も時々刻々変化している。心をオニにしてお店の人に相談しよう。諸君がチェックする時にはそのギターのベストコンディションで試奏できるように/そうすれば生涯のパートナーを見逃すなんて悲劇も防げるだろう。もしギターが決まったら、アンプについても同じように精力的に、冷酷に、魂を込めてチェックしよう。